

県花ノジギク

のじぎく保存会長 室井 綽

はじめに

この度、姫路市大塩町大塩字池の上1140番地のノジギクが自然保護条令による保護指令を受けることになった。県民が県下の自然に親しみ、自然に帰り、県下の野に咲き乱れて秋の播磨路を飾るノジギクを少しでも関心をもつようにしむけていただいたことは有難いことで、いままでほとんどかえりみられなかったノジギクも僅かばかりとはいえ陽光を受けることになるだろう。このチャンスを記念してノジギク繁殖について少しでも県民が目を楽しむための教養になると幸であると思って稿をまとめ、あわせて今後の研究者のために入手しやすい文献を纏めておいた。今後ノジギクが兵庫県花として、また、善意の花として県民の心の糧となり、自然保護をすすめていただくうえに少しでも役だつならば、大変有難いことである。

ノジギクが県花になるまで

昭和29年(1954)5月11日、県立神戸二中の卒業生で、大阪NHK、中央放送局アナウンサー佐井秀夫氏が楽室(兵庫高校)されていわれるには「明年(1955)NHK、植物友の会、日本交通公社、日本観光連盟の四者によって郷土の花が選定されることになった……」と前置して兵庫県の代表花の相談を受けた。そのときの条件は、県の花を代表する普遍的なもので美花をつけ、栽培が容易で繁殖の可能なものということであった。私は早速、ノジギク、タジマハマギク、タジマタムラソウ、スイセン、レンゲツツジ、コヤスノキなどをあげて数回よって相談した。当時のノートのメモにタジマハマギクは但馬で発見命名された兵庫県特産のキク属の一種であるが、但馬の海辺のみに生えてあまりにも生育範囲がせまく、かつ栽培が非常にむずかしいということであった。後にはワカサハマギクと同一視されるようになった。

タジマタムラソウ 春咲きの植物で、アキノタムラソウの丈を低く、美しくしたようなもの、濃紫色の花はことに美しいが欠点は栽培がむずかしう繁殖が限定されており、県花になると絶滅のおそれが多分あるので保留とした。

スイセン 淡路のスイセンは早春開花し、野外の観賞は時期的に早過ぎること、さらに全国的に栽培されているうえ、自生地も他にあるので保留となった。

レンゲツツジ 兎和野が原など北海道から九州まで日

本に広く分布し、美しく作りやすいが商品価値が高く、もし県花になると盗採されるおそれがあるため地元の迷惑を考えて保留とした。

コヤスノキ 県下の特産の樹木であるが、野生地が西播に限られており、もし県花とすると絶滅のおそれがあるというところから除外した。

結局、話し合った結果、ノジギクがつぎのことで、兵庫県花として中央委員会へ提出、ここで最後の審議をうけることになった。

1. 西南日本に広く分布しているが兵庫県が最北、最東の両限界であって、もっとも広く多く野生し、かつ美しい。さらに花形、花色、葉形、茎などの変化が著しい。それに県花となっても、そのために絶滅する心配のないこと。
2. 栽培が容易で県下のどこにも普及が可能であること。
3. 昔から花の可憐さ、芳香(クマリン)のすばらしさで愛され菊枕などとして県民の生活と深い関係のあること。
4. 開花期が秋のリクリエーションの最適で観賞、観察などの最適であること。
5. 多年生の草本で10~15年もの寿命があるので栽培が容易、ことに株分け、播種ともによくふえること。

以上の点で推薦にきまった。

中央委員会では、幸い日本中のどこの府県もノジギクを推薦したところがなく、申請通り県花として昭和30年3月22日、公布された。

ノジギクの発見史

ノジギクが発見されたのは明治17年(1884)11月のことである。発見者は牧野富太郎博士で、場所は博士の郷里に近い高知県吾川郡川口村仁淀川で、博士はノジギク(野地菊)と命名した。このとき博士は23才の青年であった。

兵庫県で初めて発見したのは山鳥吉五郎氏で明治40年(1907)に表六甲旧ケーブルの土橋駅付近であった。この場所がノジギクの東限界でもあり、また、北限界でもあった。氏は明石女子師範学校の教諭から後に西宮高等女学校長に転じたが動物、植物、鉱物などについて驚くほど博学の士であった。

その後、山鳥氏は大正13年、明石市にも野生のあることを発見し、その翌年の秋、牧野博士を招いて姫路から



岡村はた画

大塩方面を歩いて日本一の大群落を発見した。そのことが各雑誌に発表されたので兵庫県ノジギクが一躍有名になった。

その後、牧野博士は年々ノジギクの咲く頃には大塩に

観察に来て多くの写真を撮った。その一部は植物研究雑誌8巻8号には8枚ものすばらしい写真を1枚ずつ全面に登載している。

また、昭和5年11月には大塩で牧野、山鳥両氏が黄花

品を世界ではじめて発見しキバナノジギクと命名された。

昭和13年夏には六甲山を中心に未曾有の大洪水があって、その時の山津波によって六甲山の東限界のノジギクが絶滅してしまったものと思われていたが前田米太郎氏は昭和46年12月現在、土橋駅からさらに東南1000mの地点、すなわち神戸市東灘区住吉川落合橋西北300mの地点で長さ4m、幅2mの地域に数十株が残存していることを再発見され、その一部をいただき拝見することができた。当時の詳報が本誌6巻3号に載っている。

花の風土記

昭和33年10月19日、7時からNHK、大阪中央放送局、BK発、趣味の園芸、花の風土記、第19回の台本が手許にあり、有益と思われるので転載しよう。

人知れず咲きては匂う一群の

ノジギクにあう山ふかくきて……

——— 箏 曲 (秋の曲) ———

波静かな瀬戸内の海に面して、のびやかに広がる播州平野に秋風が音もなく吹き渡ると、雑草の中に埋れていたノジギクの一団が、白い可憐な花をつけてそっと頭をもたげる。

それも……人目につかぬ海辺のきり立った岩の間や、溜池の土手、或いは小高い丘の崖などに巧まずして自然の懸崖を形づくり……10月の末から12月にかけてまるですみきった秋の一日を1人楽しむかのように、静かに花を開く。

その群も……さして広く大きく広がっているものは少い。つつまじやかなノジギクの群は、山頂の風のすずに冷たい六甲の山々を遠くに望み、時に海鳴りの音が寒々ときこえる秋の播州平野の、枯れた自然の中にとけこんで、無雑作に、白くそっと咲きこぼれている。

——— 箏 曲 ———

野の花として、季節が来ると人知れず咲きつけて来た播州平野のノジギクが、はじめて世の中に……というより、地元の人々の紹介されたのは、大正の終りのこと……、今は亡き牧野富太郎博士・山鳥吉五郎先生が、姫路近く塩田のひろがる大塩付近でこのノジギクの群生地を発見されてからのことである。

牧野博士は、それ以前に、すでに土佐の山の中と海岸地帯でノジギクを発見されていたが、兵庫県での発見によってノジギクは、南に面して潮風のあたる地帯に根強く自生するキクの原種であると、学界に報告された。

菊作り40年という地元の中須通夫さんは、若き日、博士のあとを追ってノジギクをはじめ見たときの思い出を、こう話している。

「的形、八家の海辺に生えているノジギクは、何ともいえない清楚な毒気のない白い花です。私は当時から栽

培しはじめ毎年盆栽作りをして楽しんでいます。」

——— 箏 曲 ———

昭和のはじめノジギクは中須さんの手によってはじめて、当時は、姫路の城内で開かれていた菊花展に出品された。

艶を競う大菊、小菊にまじって清楚なノジギクは、見る人々に不思議な感動を与えた。

やがて昭和9年、宮内庁からの申出によって播州の野に育ったノジギクは、遠く東京の新宿御苑の一隅に移植され、晴れの観菊の宴にもつらなることになった。

——— 箏 曲 ———

しかし、ノジギクは、その後も野の花であることに変わりはない。

ノジギクを権威づけようとする人々には、或いは万葉をひもとき、その由緒のほどを明かにしようと試みたが、その企ては無駄であった。

ノジギクについて明かなことは、ただいつ頃か潮風によって播州の海辺に根を下し、幾星霜の風雨の中でたくましく生きてきたという事実だけである。

むしろ、まじめな問題としては、ノジギクが日本のキクの原種であるという牧野博士の説をめぐる、今も学界で賛否2つの意見が争われていることだが、地元の人々には、ほとんど牧野博士の説を堅く信じている。

県立兵庫高校の室井紳先生も

「牧野博士は、この大塩のノジギクを満開の花を見られて「天の川のきら星の如き群星……(室井云、植物研究雑誌、8巻9号口絵と解説)と形容しました。どうも家庭で栽培している家菊の近くでノジギクを栽培するとすぐ交雑します。したがって日本のキクがどこの国よりも立派になったことはノジギクの変異性にとんだ血が混じっているためとしか思えません」

——— 箏 曲 ———

厳密な学問上の問題は別として……直径30mm前後の小さな花ながら、色あくまで白く、太陽に向かって、精いっぱい開ききった野辺の花には、たしかに素朴なキクの原形と、きびしい風格が感じられる。

——— 箏 曲 ———

それにしても、ここで一応、日本のキクの歴史についてふりかえってみよう。

神戸市立図書館長の志智嘉九郎さんの話によると、

「キクが中国から渡ってきたことは間違いがない。今から1000年前からキクのことが出ている。万葉集にはなく源氏物語には出ているから1000年前には中国の唐の時代には栽培されていました。現代は日本の方が盛んで各種の変りものを作出している。原種は日本のものかどうかはつきり判りません。」

———ブリッジ(箏 曲)———

戦争を間において、ノジギクは再び一部の園芸家を除いては、かえりみられない淋しい野の花となっていたが、昭和30年、郷土の花として選定されてから、戦前とは違った新しい角度で眺められようとしている。

その例として随筆家岡部伊都子さんは、こんな興味深い話をしてくれた。

「花にいろいろありますがノジギクの一輪は影が薄い。県民の一人として助け合って有終の美を完うしなくてはならない。ノジギクは多く咲いて始めて美しいものである。県民の一人として皆々様も助け合ってよいものを作りましょう。県民の努力によってのじぎく文庫が出ているが、県民の助け合いによってますますよいものが出版されることでしょう」

ノジギクのためにノジギクの心をくむ人々の現われたことを心から祝福しよう。

それと同時に、海辺の岩間に、或いは山の崖に、一見、不毛の地と思われるような土地にしがみついて不思議な生命力を持ちつづけてきたノジギクが、これからも人々に勇気と希望を与える野の花として咲きつづけてほしいものである。

その点で、兵庫県観光連盟専務理事の桐山宗吉さんはノジギクのためにこんな心配をしている。

「曾根には小さい山があって、そこに^{*}しおらしく咲いている。大塩、的形では塩を作るのに濾過式^{*}でないので昔の姿がみえないのは淋しい。このノジギクは宿根草ですから毎春萌芽するが根こそぎ持って行くような不心得ものがあって困る。どうも県花などになって余り有名になり過ぎてかえっておいしい。」

———箏 曲———

ノジギクの如く生きよと嫁ぎ行く

妹を送りぬ 秋ふかき日に

秋の深まる播州平野では、これから稲刈りがはじまる。やがて、人々のめまぐるしい動きも消えて、黒い地肌をみせる野辺の彼方に嫁入りの行列の通る頃、ノジギクが白く、匂うような白い花を、今年も静に、そっと開くことであろう。

———箏 曲———

花の風土記、今朝は兵庫県の花ノジギクについてお伝えしました。

語り手は上山美智子アナウンサーでした。

のじぎく保存会の創立

ノジギクが県花に指定された当時は食糧が乏しく、山

※当時は旧式の濾過式塩田であったが、後に篠下式となり、現在はこれですたれて製塩は中止してしまっ

畑から海辺の少しの空地まで耕作が行われた。そのために畦の草刈り、雑草の除去、草焼きなどで自然にノジギクは保護されるために当時は旺盛な繁栄をした。ところが食糧の増加とともに山畑などはしだいに放棄され、その跡にはススキ、セイヨウヤブイチゴ、メリケンカルカヤ、ホウキギク、アメリカセンダングサ、オオアレチノギク、クズなどの背高の雑草が一面に繁殖してノジギクが埋って絶滅してゆくのをみて有志が相寄り「のじぎく保存会」の設立となった。

現在、この会は事務所を「姫路市飾磨区御幸町22、東光一氏」宅におきノジギクの研究、品種保存、自生地の除草、採種と播種、ノジギクに関するPRなどを行なっている。心ある方々の参加をお願いしたい。

文 献 (県内のものを主として)

阿部知二 (1967): 野地菊を思う, 山陽ニュース, 11号 12~13

——— (1969): 菊の香, 世界, 254号, 284~299

江越千代子 (1965): 曾根、大塩付近のノジギクを探る: 兵庫生物, 3巻3号, 129~130

藤原悠紀雄 (1956): 兵庫県におけるノジギクの分布について, 同, 104~105

——— (1960): 県花ノジギク, 兵庫の自然, 8~9
兵庫県広報課 (1964): ノジギク, 兵庫県

兵庫県農蚕園芸課 (1969): 県花ノジギクの作り方, 兵庫県

金沢 竜 (1969): 的形、大塩の海岸植物, 生物学会, 続兵庫の自然, 116~118

近藤昭一郎 (1960): ノジギクとリュウノウギクの染色体について, 兵庫生物, 5巻2号, 139~141

——— (1962): ノジギクの染色体とその見方, 生物学会, 県花, 県鳥, 県樹, 46~52

前田米太郎, 杉田隆三, 藤本義昭 (1972): ノジギク30年, 同, 6巻3号, 218~221

牧野富太郎 (1933): ノジギク, 植物研究雑誌, 8巻9号, 口絵

——— (1933): 家植菊の原種に立つべきノジギク, 実際園芸, 15巻3号

室井 紳 (1960): 口と目で楽しむ県花, 山陽ニュース, 12月号

——— (1962): 県花ノジギク, 兵庫生物ハイキング, 45~47, のじぎく文庫

——— (1966): ノジギクと私, 兵庫教育, 18巻9号, 25

——— (1967): 県花ノジギク, 県生物学会編, 県花, 県鳥, 県樹, 1~76

西村省治 (1964): 母と菊枕, 雪, 16巻, 11号, 98~99

のじぎく保存会 (1962): 県花ノジギク, 同会
 山陽ニュース (1969): 県花ノジギクハイキング, 山陽電車
 下斗米直昌 (1935): 菊の生態と細胞遺伝, 養賢堂
 工 正勝 (1960): 姫路市大塩地域のノジギクの変異, のじぎく保存会
 —— (1964~5): 郷土の花ノジギク, 武陽通信, 22~23号
 —— (1965): 菊, 山陽ニュース, 11月号

—— (1966) 県花ノジギク, 紅谷進二, 兵庫の自然, 8~9
 —— (1969): アカバナノジギク, 武陽通信, 38号, 21~22
 上田菊童 (1968): 菊を作って50年, 京都園芸, 59輯, 55~60
 山鳥吉五郎 (1935): 野地菊に就て, 博物学雑誌, 33巻, 14
 —— (1943): 野地菊, 随筆の植物, 158~162

森・三木・紅谷生物研究奨励金の中間報告

兵庫県生物学会の初代会長である森為三博士生物研究奨励金が誕生してから本年度で丁度10年になりますので、その経過と奨励金授与の状況を報告して、そのご厚志に感謝の意を表わし、今後とも後に続く方々を期待したいと思ひます。

森会長は昭和22年本会発足以来、昭和37年7月に逝去されるまで、常に会員とともに歩まれ、身をもって垂範指導をされました。そして森会長のご逝去後、奥様から森会長の遺志として、ご香料の中から本会へ10万円を寄贈され、用途を本会に一任されましたので、理事会で協議の結果、総会にかけてその利息を「森為三博士生物研究奨励金とすることになり、毎年1人ずつに研究奨励金を贈呈することになりましたが、翌昭和38年にさらに5万円の追加寄贈をいただきましたので、翌39年からは受給者が毎年2名ずつとなりました。

また、昭和41年には本会会員の三木順一医学博士から生物研究奨励基金として10万円の寄贈を受け、森・三木生物研究奨励金と呼ぶことになり、翌42年には紅谷進二会長から10万円の寄付をいただき、森・三木・紅谷生物研究奨励金と呼ぶことになり、昭和43年度からは3名ずつ贈呈することになりました。

生物研究奨励金贈呈者の推薦について

ご承知のように毎年1月頃の理事会で研究奨励金贈呈者を詮議決定しておりますので、会員のご推薦方をお願いいたします。被推薦者の略歴、研究行績等をお書きそえのうえ、各支部の理事または会長(副会長)あてにご推薦くださるようお願いいたします。ただし、推薦者、被推薦者とも本会会員に限られています。

森・三木・紅谷生物研究奨励金贈呈者一覧

回数	年度	氏名	研究内容
1	38	西村 登	水生昆虫の生態的研究
2	39	稲田 又男	シダ植物の分類生態的研究
		猪股 涼一	ハバチ類の生態的研究
3	40	藤本 義昭	イネ科植物の分類学的研究
		三木 順一	スミレ属植物の研究
4	41	金沢 龍	海藻の研究と生物教育
		前田米太郎	ショウジョウバエの研究
5	42	近藤昭一郎	植物の核型研究
		富川 哲夫	溜池のプランクトンの生態的研究
6	43	杉田 隆三	植物の生態的研究
		谷口 博	理科(生物)教育
		細見 彬文	動物の生態的研究
7	44	岡村 はた	植物の区分キメラの研究
		近藤 浩文	理科(生物)教育
		森本 義信	地下水動物の研究
8	45	今津 達夫	淡水植物プランクトンの研究
		建部 恵潤	郷土の植物研究
		中村 勝	動物の生態研究・理科教育
9	46	安房 明	理科(生物)教育
		岩村 巖	日本産蝶類の研究
9	46	内海 功一	船越山の植物研究
10	47	家永 善文	藻類の研究
		高橋 匡	昆虫類の研究・理科教育
		橋本 光政	植物の生態的研究
		宮本 忠之	鳥類の研究